

地域と学校 その7

わっか型の校舎案の誕生

小松 尚 (名古屋大学大学院環境学研究科准教授)

先回は特別号として10月21日の100周年記念行事の報告をしましたが、10日後に開催された学校運営協議会(石榑の里共育委員会)では、出席者の表情に充実した達成感と心地よい疲労感がうかがえました。さて、今回は戻って、建設委員会での新校舎の具体的な案づくりの様子をお話します。

地域の人々の思い

緊張した面持ちで始まった建設委員会ですが、第4回委員会までは学校の新しい校舎を造っていくにあたっての抱負を語り合いました。学校のことで子どもたちの学習や安全に関する意見や、機械に頼らないエコスクール、きれいなトイレ、バリアフリーなど今日的な意見もありました。なかには、「真ん中に柱のある教室」というアイデアも。そのココロは、子どもが先生の目から逃れたい時には、その柱の陰に隠れられたらという親心でした。さすがにこのアイデアは採用されませんでした。子どもも時には一人になりたい時があります。間仕切り壁が無く広々としたオープンスクールは、誰からも見られているという雰囲気があります。最近では、教室の片隅にデンと呼ばれる隠れ家のような小空間を用意している学校もあります。

一方、地域との関わりという点で多くの方が語ったことは、「石榑らしさ」でした。「石榑の自然・産業・文化を反映したい」とか、「石榑のすばらしい景色が眺められる場所がほしい。特に竜ヶ岳は絶対」、「集まる時に、どこだと言わずとも、誰もが石小だと思えるように」、「いつもにぎわっていて、お茶作りやもち作り、コマ回しなどで交流したい」などなど。竜ヶ岳(1,099m)については、頂上までが石榑校区であり、今も森林組合で管理されているということもあるでしょう。また、旧校舎を惜しみつつも、取り壊されたことで再び竜ヶ岳や山々を一望できるようになったことを喜ぶ声を聞きましたし、100周年記念式典での「100年前と変わらないのは竜ヶ岳と石榑の人々の心」という言葉も印象的でした。

また、石榑産の石材と木材を使った純石榑産校舎にしたいという意見もありました。石榑という地名の由来はよくわかりませんが、かつては花崗岩の採掘場があり、校区の半分は山林で、木材を産出する土地柄を表わす名前と言えます(「榑」は屋根葺材や貢納品としての板材などの意)。

このような意見とともに、見学に出かけた北方南小学校(岐阜県北方町。エコスクールを進めている)、品野台小学校(愛知県瀬戸市。陶器の街という地域性が反映され、特別教室が地域開放ゾーンと一緒にしている)で感じた点を出し合いながら、①子どもたちが生き生きと学べる学校、②豊かな成長を支援する学校、③地域の方々のふれあいの場となる学校、④地域の特性を活かした特色のある学校の4点がこれからの検討方針として確認されました。

グループディスカッションで案づくり

第5回委員会から、いよいよ具体的な計画の検討に入りました。まず配置計画です。設計事務所の二人から、まず敷地のどこに何を置くのかを考えることが重要であるという説明を受けた後、3つのグループに分かれました。グループには教育長や校長先生、教頭先生も入りました。この日は30分という限られた時間でしたが、予め用意された校舎や体育館、プール、駐車場などのパーツを手に、貼ったりはがしたりしながら敷地図に置いていきます。結果的には、3グループとも東に校舎、西にグラウンド、東端と北側に駐車場という構成はほぼ同じでした。買足した敷地に校舎を建てて、工事中も旧校舎とグラウンドでの子どもたちの学習や生活を阻害しないようにということからでしょう。加えて、北東隅の茶畑は残して教育に活かしたい、南西角の井戸を復活させたいといった実際に実現した案や、運動会などの時に必要な駐車場(250台分)をどう確保するか、冬に風が非常に強いのでその対策が必要といった、地元ならではの意見もありました。

第6回委員会では、この3案のエッセンスを元に設計事務所がまとめてきた2つの配置案と、それに合わせた大まかな平面構成案(A・B)が提示されました。A案は中庭を校舎が囲むという、現在の校舎に似た構成です。「似た」というのは、上階が普通教室群、下階が特別教室群と地域施設という実現した構成ではなく、大きく南側に普通教室群、北側に特別教室群と地域施設と分かれて配置されているためです。一方、B案は性格の異なる3つの中庭に教室や地



・グループに分かれてのディスカッション
教頭先生や教育長も一人のメンバーとして加わって、喧々囂々議論しました。



・A案の上階平面図
中庭を中心に諸室を配置している案
この段階では南側に普通教室、北側に特別教室が配置されている。



・B案の上階平面図
3つの中庭があり、棟ごとに機能が分かれている案。

域施設が面し、南北に抜ける廊下で全体がつながった構成です。

この2案を前にして意見交換とともに、小学校に欲しい場所について議論が始まりました。ここで、地域施設について2つの考え方が出てきました。「大人のサークル活動などは別の公共施設を使えばよく、学校は児童との交流中心にしたい」という意見と、「いや、大人の姿を見せることが子どもたちにより影響を与える」という意見です。この議論はこの回ではまともならず、持ち越しになりました。第7回委員会でも議論は続きましたが、やはり石榑の中心である石小に地域住民も使える場所が欲しいという結論になりました。

第7回委員会では、敷地の4mのレベル差をどう活かすかという議論に進みました。2つの案のブロック模型を前に、ちょうど一層分ある敷地のレベル差を活かした断面構成とすること、中庭は木製デッキやタイル仕上げとして上足のまま出られるようにすることが分かりやすく示されました。木製デッキへの関心は高く、後日見本を取り寄せて確認もしました。

そして、わっか型の空間構成へ

第8回委員会でも2つの案を前に議論が続きました。地域ゾーンの規模の見直し提案などもありましたが、案を絞り込んでいく上での重要な意見が出始めました。それは総合すると、①中庭を囲むA案の方がまとまりがあっていい、②しかし、北側に配置された障害児教室が南側の普通教室群から孤立している、③低学年の教室は職員室の近くがよいという意見です。中庭を囲むA案に傾きつつも、南側に普通教室が集約された空間構成がまだしっくりこないということでしょう。

この意見には、別の後押しもありました。地元住民中心の建設委員会と並行して、設計事務所は学校の先生方とも検討会を進めていたのですが、建設委員会の意見を話したら、「じゃあ障害児教室の隣に低学年の教室をもってきたら?」というごく自然な返事が返ってきたのです。設計事務所の二人は「普通教室は南側に!」という観念にとらわれていたと今では振り返っています。

それじゃあということで、第9回委員会では上階に普通教室、下階に特別教室と地域施設という空間構成が提案されました。中庭の囲み方や体育館、プールの位置は実現したものと異なりますが、上の階にすべての普通教室が並んで中庭をぐるっと囲むという、新校舎の最大の特徴が形になりました。

ここからは、学校の機能と空間については学校の先生方の検討会にお任せし、建設委員会では地域住民が利用する施設について検討していくことになりました。第10回委員会では地域施設に関する議論が行われましたが、使い方や面積についての意見だけでなく、地域で管理することを考えるべきだという意見が出されました。それを受けて、地域施設だけでなく特別教室も配置されている下の階すべてを地域の人が利用できるエリアとして管理できるようにする、そのために特別教室は閉じた部屋でなく、オープンなスペースにしたいという方向性が出てきました。

管理の仕方についてはこの後もいろんな段階で議論が重ねられましたが、現在はずべてを地域が管理するということにはなっていない。しかし、オープンな特別教室というアイデアは実現されました。家庭科室や理科室、工作室がギャラリーに向かって開放され、さらに中庭へと続く空間構成は、大人数が収容でき、また調理した料理をすぐに振舞えるなど、竣工後の各種イベントで大変上手く機能しています。

さらに、第10回委員会では屋根のデザインが提案されました。茶畑をイメージした連続したボルト屋根と切妻屋根です。ボルト屋根は谷の部分に雪が落ちて漏水するのが心配、でも切妻屋根は平凡だな…。石榑は雪がよく降る土地で、かつては膝くらいまで積もることはよくあったそうです。そういえば、建設委員会2年目の年に赴任された校長先生が心配していたのも屋根形状でした。RC校舎時代に教頭先生として赴任し、雨漏りに悩まされたからです。

さあ、こうして新校舎計画の大きな方向性はできあがりしました。次回建設委員会は、中間報告会として広く地域に問いかけ、気運を高めていくための公開ワークショップです。